

身体観の歴史 人は「からだ」をどうみてきたか

酒井 シ ヅ

これまで身体観の歴史はさまざまな視点から考察されてきた。しかし、古代からの造形物や絵画あるいは書き物を並べてみると、共通しているはずの人体が、時代、場所によって驚くほど違った見方で捉えられている。そこで原始時代から現代に至るまで遺された身体の彫像や図などの表現から身体観の推移、東西世界の違いを考察することが本講演の狙いである。

身体表現は時代が古くなればなるほど地域で変化に富んでくる。つまり、関心を抱いて、強調しているところが時代と地域によってかなり違う。しかし、ある時代から図像で示される身体観は、地域差が希薄になった。近代医学の解剖学の知識が身体を語る共通語になったときからである。ここでは身体像が客観化されて統一され、疑問を差し挟む余地がない。まして、二十世紀に入ってDNAというあらゆる生物に共通な言語が発見されたことで、身体を遺伝子のレベルで語るようになったが、そこでは人類だけでなく、あらゆる生物に共通の認識下からだが置かれてしまった。

だが、その一方で、現代は身体観の地域差が明確になった時代でもある。東西世界だけでなく、さまざまな文化圏で育った身体観は簡単に均一化されそうもない。事実、われわれは脳死、臓器移植の問題で、日本国内ですら共通の身体観に帰結することが難しいことを経験した。からだは現代医学では説明し尽すことが出来ないことが認められたのであ

る。

古代の絵画や彫像に見る身体観は東西でかなり違う。それは服装や風俗の違いだけでは説明できない。極端にいえば、西洋の動は活力を感じ、それに対する東洋は静である。たとえば、ギリシャ彫刻には激しい動きに力強さがみられる。

また立像からも顔の表情と四肢に動きを感じる。それに対して、東洋の彫像は静である。西安で発掘された兵馬俑が百を超えて整然と並んだ隊列からは、軍靴の音が聞こえてくるようで威圧される。だが、ひとつを取り出したとき、静である。兵馬俑が写実的な作品であることはギリシャ彫刻に劣らない。しかし、デルフォイのアポロン神殿に捧げられた群像の御者に比べて、兵馬俑には躍動感がない。表情がない。その背景に、身体に対する根本的な考え方の違いがあるのではないだろうか。たとえば、ギリシャ彫刻や絵画では胸や腹の筋肉や、筋肉の盛り上がった力強い四肢が表現されている。ときにはアリストテレスの像にみるように怒張した血管が浮き出ている。それが兵馬俑にない。それは中国医学と西洋医学の違いをあらわしているのではないだろうか。中国医学には筋肉、神経、血管の認識がなかった。全身のはたらきは氣と経絡で説明されてきた。氣は経絡を通じて全身を巡る。西洋では力は筋肉の緊張で表現される。

しかし、紀元前数千年の古代文明を誇る王国エジプトでは、パピルスの「死者の書」にみるように、とくに筋肉の表現はない。表情や動きは静と動が混じる。筋肉の動きはない。ギリシャと中国の中間に位置するインドでは、表現が騒々しくなる。動と静が混じる。インドでも時代が降り、仏像になると、静となる。絵画・彫刻から動的な要素が少なくなってくる。

日本の医書にみる挿絵は『医心方』の巻二十二に妊娠図十葉がもつとも古い。全体にぼつたりした絵で、緊迫感がない。つきに出てくるのが人体の内景図であるが、からだという袋の中で五臓六腑がバランスよくならんでいる。生命力は氣で表現されているが、それを表すことはできない。

西洋の理想的な人物像が引き締まった裸像で表現されるのに対して、東洋ではふつくと描かれている。しかもだぶ

だぶの衣服をまとい、からだの線はみえない。日本も同じである。七福神にみられるように、ゆったりとした衣装に大きな腹をしている大黒天や布袋が福の神として信仰されてきた。太っていることに価値があった。ギリシャ彫刻の理想的な健康美は筋肉の均整のとれた肉体で、裸像が完全な美を表現した。ポセイドンの神にみる筋骨が隆々とした、均整のとれた男性の裸像が高く評価された。西洋では筋肉は人体の基本的な構造であると同時に生命力を表現したからである。西洋でボディビルが盛んなのは、こうした文化的、歴史的背景があるといえる。

ところで、裸像の評価は東西世界で違った。日本では古代の裸像は皆無である。四天王像はある意味で男性の理想像であったが、鎧兜に身をかため、肌はまったく見えない。二王像は胸をただけ筋骨隆々であるが、筋肉のつき方、肋骨の形は写実的でない。

平安朝になって、王侯貴族の絵巻物に理想の男性が描かれているが、下膨れの柔和な男性像である。男性的な像は戦国時代になって登場するが、歴史的に役者のような優男が好まれた。

西洋の女性の理想像、美の象徴ヴィーナスの裸像は均整がとれ、乳房が豊かで、腰が張り、適度に緊張がある、やわらかな腹である。顔は瓜実顔で、鼻や唇の形が美しいが、表情はあまりない。表情より形が重視されている。肢体は緩やかな動きを示して、誘いかけるようである。ここでも美は動にある。

一方、日本の女性の彫像は、先史時代を別にすれば、五重塔の塑像群の中に出てくる。女性と判断するのは、表情と顔かたちからであるが、肉体からはみられない。胸や腰の女らしさは美の対象でなかったのだろう。からだからは男女の区別ができない。

平安時代の王朝文学が盛んな時代、文学の中では女性の表現は豊かである。しかし、絵巻物では、肉体は華やかな衣装の下に隠され、読みとれるのは顔の表情だけである。こうした状況だから、髪の毛が女性美の象徴であったというのも頷ける。美しい顔という好みの基準は時の流れにつれて変わっている。飛鳥時代から平安時代、絵巻物が盛んに描か

れた鎌倉時代の女性は、下膨れの顔が好まれた。「お多福」顔が美人であったが、江戸時代になると、初期の浮世絵の女性はやや丸顔であった。後期になるにつれて、面長で、鼻筋が通った顔に変化してくる。西洋的な美の基準に近づいていつている。

先史時代の身体観

先史人が身体をどのように見ていたのかについて遺物から考察すると、先史時代の女性の理想像は多産で、それに耐える豊かな肉体であった。紀元前三万年から二万五千年頃のものといわれるウイレンドルフのヴィーナスは大きな乳房と大きな腰、膨らんだ下腹部が強調されている。紀元前一万年以上の、トルコから出土したチャタル・ヒュユクの女性座像は垂れ下がった大きな乳房、多産で何重にもたるんだ腹、股間から胎児の頭が現れている女性像であるが、両脇を二匹のレオンが固めて威厳を高めている。現代人には醜悪にみえる肉体が、地母神として崇拜されていた。豊穰を祈るだけでなく、女神に安産を祈ったのであろう。日本の場合は、縄文時代中期以降の遺跡で見つかった土偶に、乳房がふくらみ妊娠したものがあふ。

ところで、西アジアでは新石器時代後期にヴィーナス神話が誕生している。東地中海の地域、シリアやフェニキアではアスタルテとして性愛と美の女神が裸身の姿で表現されている。それに対して、同じく東地中海のエフェソスで女神として崇拜されたアルテミスは、胸にブドウのようにたくさんの乳房がついたような衣服をまとう。この女神は美と多産と安産の祭神であった。ヴィーナスはその後、愛と美の女神として裸身で、官能的な性格が強調される。乳房が美と性愛の象徴として賛美されるようになる。

一方、東洋では殖輪は無表情で、胸も腰も膨らみを強調したものは見られない。男女の違いを表すために、女性の殖輪の胸に小さな突起があるにすぎない。乳房を誇張することがなかった。裸身崇拜のなかった日本では豊富な乳房や腰

が美の象徴になることがなかった。それが乳房に対する価値観を西洋と違ったものにさせたといえる。

古代人は東西を問わず、人体を宇宙に比較して考えた。身体の中も宇宙と同じような秩序で統御されていると信じていたのである。ギリシャでは、なかでもサモス島のピタゴラス（紀元前五八〇—四八九）はかなり早くから、宇宙を支配している調和と均衡の原則を、人体という小宇宙に反映させて、健康と病を調和と不調和で説明している。

脳

ピタゴラスがサモスから移った南イタリアのクロントンの医学校では、古くから医学教育が行われていたが、ここでは、身体の中樞は脳であるという伝統があつた。ピタゴラスは知性と理性の座を脳に置いているが、感情の座は心臓にあるといっている。

ピタゴラスより少し若かつたクロトン出身のアルクマイオンは、動物解剖で視神経を見つけたことで有名であるが、こころのはたらきを脳にむすびつけた最初のひとだともいわれている。脳が知能も感情も支配すると主張したのである。アルクマイオンは脳を傷つけると、痲痺などが起こることも見ている。面白いことには脳が精液を造り出すと述べている。また、胎児の男女は分泌される精液の量によつて決まると述べたが、それ以前の通説は精液は脊髄で造られるという説であつた。ちなみに中国系では腎で精液が造られているとずっと信じられてきたのである。ところでアルクマイオンは健康と病は体内のいくつかが対立する因子の調和と不調和という概念で説明している。この対立概念で病気の原因を説明する考え方がのちまで影響を与える。

アルクマイオンより少し時代があとのヒポクラテスになると、こころの座が脳であるとはつきりのべている。ヒポクラテスにはてんかんについて書いた「神聖病について」という著作があるが、その中で、狂ったり、錯乱状態になることは脳に原因があると、こころのはたらきの中樞が脳であると述べる。

ヒポクラテスと同時代人プラトン（前四二八—三四七）の著書『ティマイオス』は後世の生理学に大きな影響を与えた著作であるが、その中で靈魂と脳とを結びつけている。靈魂は理念、情念、および物欲とにわけられているが、人体は不滅の靈魂のために造られたものであるのも、もつとも高尚な理念の靈魂は丸い脳におさまると解釈した。それより下級で、生滅する靈魂、すなわち情念と物欲は、横隔膜をはさんで上下に存在する。つまり、情念は胸の脊髄に、物欲は腹部の脊髄にあると述べる。同時にプラトンは生命と心臓の関係について、次のように説明する。生命は火と結合し、火はプノイマよりくるものであり、血液に内在する。血液は全身を巡って、栄養を司るが、血液の源泉は心臓である。全身の血管は心臓に集まると。こうして西洋では、脳がこころの中枢であり、生命は血液と心臓にあり、心臓は熱いという説が伝統となつていったのである。

プラトンの弟子アリストテレス（前三八四—三二三）は、こころの座は心臓であると主張した。ニワトリの発生を観察したとき、血液が現れ、心臓の動きが最初に観察されるからである。一方、脳は単なる分泌器官に過ぎなかつた。心臓から脳が上がった熱は脳で分泌される粘液で冷やされる。脳は腺の集まりであると解釈したのであつた。アリストテレスの思想はアラビアに伝わり、それは初期ルネサンスのときにヨーロッパに回帰して、スコラ学派の主張するところとなつたのである。

アリストテレスと同時代のアレクサンドリアの学者たちは人体解剖を行い、はじめて解剖学と生理学の先駆者といわれるが、そのひとりエラシストラトス（前三三〇—二五〇頃）は神経が脳から出ることを明らかに示し、神経に運動神経と知覚神経があることを明らかにした。また大脳と小脳の区別を明確にして、精神の場は小脳であると推論している。心臓は血管の集まる場所であつたが、動脈を満たしているのはプノイマであり、血液は静脈だけに存在すると述べた。プノイマは呼吸によつて補給され、肺から心臓に入る。そこで心臓の拍動で全身に分布するが、このとき二つに分かれ、一つは動脈を通つて、身体の末端にまで行くが、もう一つが脳に行き、脳で精神のプノイマとなり、神経を通じて末端

の運動と感覚を司ると解釈した。この説はガレノスによって洗練されて、その後長い間ヨーロッパ、アラビアで信じられたのである。

古代ギリシャの学説は、ローマ時代にガレノスによって集大成されて、装いを新たにした。それによると、心臓から脳に昇ってきた血液中のプノイマが脳底で特殊な「血管網」（人には実在しない伝説的なもの）を通ることで精製されて、アニマの霊気が変わる。霊気は脳室内に蓄えられ、必要に応じて神経を通って末端に行き、運動、知覚を司るとしたが、同時にこのころの介在がプノイマにあるとした。このころ、すなわち精神の場についてガレノス自身は脳の実質にあるとした。だが、キリスト教が盛んになった四世紀の頃から、このころの動きを三つに分かち、それぞれの座に前、中、後の三つの脳室を当てた。つまり、前方の第一の脳室には一般感覚を、第二には認識、第三は運動と記憶の能力を振り当てたのである。脳室を三つに分けることはヨーロッパの伝統的な脳の見方となり、それから後もずっと続いていた。あの有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖図にも三つの脳室が描かれている。しかし、かれ自身の後期の解剖図では溶かした蠟を脳室に流し入れて、鑄型をつくって脳室の正確な像を明らかにしたように、この頃から、脳の正確な知識が得られるようになり、機能の所在が再び脳実質に戻ってきたのである。因みに、脳室の評価はその後長らく低迷していたが、再び重視されてきたのはごく近年のことである。

ところで、中国医学では脳への関心は乏しかった。因みに古代中国の甲骨文字の「心」は、心が生命にとって重要な器官であることを示し、心が五臓六腑の中でもっとも高い地位、君主の官である。それで日本もまた心からだの中樞と考え、脳は単に髄の集まりであるという伝統になっていたのである。日本で脳が身体の中樞であることを認めたのは、杉田玄白の『解体新書』が翻訳出版されたあとである。

『解体新書』が翻訳されたあと、日本人の身体観は大きく変化した。それより先、本木良意が Remmerin の Microcosmographicus を訳した『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』では、西洋医学を東洋医学のことはで解釈している。いま、それを

みると、東西の知識の違いがどこにあったかが浮き出てくる。一方、『解体新書』では、最初から西洋の言葉の訳語を造りながら解釈した。そこで西洋の身体観が新たに受容されたのである。本講演では、こうした点を中心に語る予定である。

(順天堂大学医学部医史学研究室)